

令和3年度 本郷中学校  
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含まれます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【二】 次の①～⑤の――線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 利根川は関東の一級河川だ。
- ② 紙がヤブれる。
- ③ オウフク切符を買う。
- ④ 王家のヒホウを展示する。
- ⑤ 理科の実験でジシヤクを使う。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は、一人では生きることのできない存在である。アリストテレスは、人間を「ロゴスをもつ動物」と定義した。注<sup>1</sup> ロゴスとはことばであり、分別であり、理性である。「ロゴスをもつ動物」とは、ことばによるコミュニケーションにもとづいて生きる動物という意味である。コミュニケーションは、人間どうしの間で行われるから、アリストテレスの「ロゴスをもつ動物」というのは、「社会的動物」であるというのと同じである。

学校を例に人間の集団を考えると、クラス分けによって子どもたちは、特定のグループに所属する。クラス分けは、子どもたち自身の選択にもとづく集団形成ではなく、子どもたち以外の人がよによる指定によって決まる手続きである。どこに所属するかは、子どもたちにとっては、いわば遭遇<sup>そうぐう</sup>であって、選択ではない。そこでクラスメイトに出会うことになる。これも遭遇である。クラス環境では、気の合う者とそうでないものが自然に分かれる。気の合う者がいなければ、仲間に入れない状況が生まれる。<sup>1</sup>

気の合う者どうしが集まれば、そこには新しいグループが生まれる。そのような人間環境を「なかよし環境」と呼ぶことにしよう。学校であつても、会社であつても、政府であつても、人間社会のなかには、なかよし環境が存在する。なかよし環境は、楽しみや好みを共有する集団である。

なかよし環境が組織のなかで生まれるとき、そして、それが利益の囲い込みを生み出すとき、そのような集団は「ムラ社会」と呼ばれる。ムラ社会では、集団の利害に従わない、X、ムラ社会のルールに背く者を排除する傾向をもつ。昔は、これを村八分といった。村八分は、共同体に従わない、あるいは、共同体の利益に沿わない人を排除することである。二分というのは、葬式の世話と火事の消火活動で、それ以外の付き合いはしないということだといわれる。

いじめという暴力が発生しやすいのは、クラス環境となかよし環境である。なかよし環境にあるのはなかよし集団であるから、排除は発生しないのではないかと思われるかもしれないが、そうではない。なかよし集団がその内部に小さな集団を生み出すと

き、そこに反目と排除が発生するからである。

わたしたちは、人生の至るところで、さまざまな集団に所属する。あるときはクラス環境、あるときはなかよし環境、あるときはプロジェクト環境である。Y、クラス環境では、わたしたちの選択は限られる。なによりも集団への所属そのものが選択の対象ではないからである。なかよし環境は、好みの合う、気の合う仲間の集団であるから、その集団への帰属は、通常、自らの選択の対象となる。しかし、なかよし環境では、気の合う仲間どうし的时候はいいのだが、いったん関係がぎくしゃくしてしまうと、反目や排除といったことが生まれかねない。以前なかよしだった二人、あるいは、三人が憎しみあうことにもなる。なかよし環境というのは、そういうリスクをつねに含んでいる。

わたしたちは、さまざまな場面でクラス環境となかよし環境のなかで生活している。家族は、血縁関係で結ばれた一種のクラス環境と考えることもできる。わたしたちは、家族への所属をみずからの選択にもとづいて得たわけではないからである。それは、所属する本人の選択による所属ではなく、両親の選択と行為の結果としての所属だからである。

会社や行政組織などで所属するグループもまたクラス環境の一つと考えることができる。ある会社に就職することを望み、試験を受けることは選択である。しかし、採用は会社のほうの選択である。さらに、組織のメンバーに属することは、「配属」による。「配属」とは、人を一定の部署に配置して所属させることであり、本人から見れば、一定の部署に配置・所属させられることである。組織やその下部組織としての部署では、その部署のメンバーが従うべきルールや規範があり、これに従って仕事をする。生産部門であれば、製品を生み出すための作業を行うが、そこでは、ルールに則した効率的な行為が求められる。営業部門では、顧客とのやりとりのなかで契約を成立させるための行為が要求されるであろう。これらの業務では、一定の達成目標が定められるが、その目標の達成のためのルールや規範はすでに定められている。

クラス環境となかよし環境とならんで、もう一つ重要な環境である「プロジェクト環境」をとりあげよう。プロジェクト環境とは、クラス環境でもなかよし環境でもない、第三の環境である。この関係を成立させるのは、クラス環境のように、集団外の第三者でもなく、集団構成員の利害でもない。ともに力を合わせて協働することによって実現すべき目標である。プロジェクト

環境では、グループのメンバーは、達成すべき目標を共有して、これを実現するために協力しあう。

プロジェクト環境を形成する基礎は、プロジェクト集団を統合するプロジェクトの存在である。プロジェクトとは、唯一のな目標を達成するためのプロセス、スタートから始まってゴールをめざす活動である。この環境では、実現すべき目標に向かう努力が集団をまとめる力となっている。プロジェクトのメンバーはたまたま集団のなかに入ったのでもなく、好きだから仲間になつたのでもない。何かを成し遂げるために力をあわせて共に行動するために集まるのである。

プロジェクト集団は、プロジェクトを遂行するためのチームである。クラス集団もなかよし集団もチームではない。プロジェクトを遂行することのために集まった集団がプロジェクトチームである。

クラス環境、なかよし環境、プロジェクト環境と三つの環境をわたしが挙げてきたのは、「A」にもっともかわるのがプロジェクト環境だからである。学園祭で劇を上演する、運動会で出し物を演じることなどは、プロジェクトといえなくもない。しかし、すでに選択の余地もなく演目が決まり、役も指定されているならば、文字通りのプロジェクトということはできない。目標も自ら設定し、それに向かって同志が集まり、ゴールに向かう道筋を話し合い、その道筋に沿って作業をスタートさせるのであれば、これはプロジェクトということができる。

高校生や大学生であれば、自分たちでプロジェクトを組織し、そのプロジェクト環境をみずからつくって、目標達成のための作業を行うことができる。そうすることが「選択能力」としての「思慮深さ」を磨くのに役に立つ。

このとき大切なのは、プロジェクトは、ある時点でスタートし、ある時点でゴールに到達するということである。プロジェクトが終了するのは、ゴールに到達したとき、または、ゴールに到達することが不可能であると判明したときである。そのとき、そのプロジェクト環境は終了し、プロジェクトチームは解散する。

<sup>4</sup> たくさんのプロジェクト環境に参加することで、わたしたちは、それぞれのプロジェクトの目標を達成するために何をなすべきか、何を選択すべきか、その選択を可能にする能力にはどのようなものがあるか、そのような能力を身につけるにはどうしたらよいかを学ぶことができる。多彩なチームメンバーとの協働の経験を積むことができる。そうすることによって、どんな状況

にも最適な選択を行うことができるようになる。ここまでいくと理想であるが、そうした理想を実現することにより、「思慮深さ」は身につけていく。

一つのプロジェクトが終了するとき、そのプロジェクト環境も解消するわけである。目標達成のためのチームなのであるから、解散するということが重要である。いつまでもだらだらと同一環境を維持しないということが大切なのである。そのことが多くのプロジェクト環境に身を置くことを可能にする。一つのプロジェクトだけに従事していたのでは、蓄積される経験は少ない。

もちろん、同時に複数のプロジェクトに身を置くこともできるのだが、そこでのメンバーどうしとの関係は、プロジェクトの終了ごとに解消する。プロジェクトごとにそのチーム内で求められる役割は異なり、また発揮する能力にも違いがあるから、わたしたちは、さまざまなプロジェクト環境に身を置くことにより、多様で複雑な選択を経験することができる。多様な人間関係も経験することができるであろう。こうして、プロジェクト環境は、人間の選択能力としての「思慮深さ」を磨いてゆくのである。

三つのグループのなかで行動するためには、それぞれに適した「思慮深さ」が求められる。クラス環境では、クラスの秩序を乱さないことが大切で、そのためには、クラスを支配するルールをしつかり認識し、それに則<sup>のっと</sup>って行動しなければならぬ。

なかよし環境では、なかよし仲間の好き嫌いを認識し、仲間の和を乱さないような行動が求められるであろう。時には集団を支配する暗黙のルールを認識し、それに従った行為を選択できること、いわば「空気を読める」<sup>5</sup>こと、あるいは、なかよしグループの和を乱さないような行動を選択することがこうしたグループでの適切な行為の選択である。たしかに、こうした選択にも、ある種の思慮深さが求められる。

クラス環境となかよし環境のどちらもが既存の秩序やルールに従う言動を選択することが求められるが、人生では、すでに存在する規範に則して行動すれば最適な選択ができるとはかぎらない状況に遭遇する。

未知の領域に踏み込むと、わたしたちは、どのような選択をすればよいかに迷う。すでに述べたように、現代のわたしたちが直面している数々の課題は、既存のルールや規範だけに依拠<sup>注2</sup>していたのでは、解決できないことも多いのである。そうしたなかで、解決すべき目標を共有し、限られた時間のなかで、その目標を達成するための協働を行うグループがプロジェクトチームで

あり、プロジェクト環境である。

現代の若者には、「対話」の力が求められている。文部科学省が進めようとする教育も「対話による深い学び」と性格づけられている。わたしがここで、教養を磨くための方法と考えるのは、プロジェクト環境のなかでの対話能力である。それは、クラス環境のなかで友達となじむための対話やなかよしグループが喧嘩けんかしないための対話ではない。高い目標を掲げながらその目標に向かって行動し、協働するための対話力である。こうした対話力には、解決すべき課題について深く理解する力や、現代という時代が抱える難しい問題に挑戦するプロジェクトを果敢に推進する力も含んでいる。この対話力こそが、プロジェクトチームが所与しよよの状況とさまざまな遭遇を超えて、問題解決に至る思慮深さの学びとなるのである。<sup>6</sup>

(桑子敏雄『何のための「教養」か』)

※ 問題作成の都合上、文章中の小見出し等を省略したところがあります。

注1 アリストテレス……古代ギリシアの哲学者。

注2 依拠して……基づいて。

注3 所与……前提として与えられること・もの。



問一

X・Yに入る最も適当な言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号を

繰り返し用いてはいけません。

- ア たた                   イ なぜなら                   ウ ところで                   エ あるいは

問二

——線1「クラス環境」とありますが、この環境での様々な場面における説明として、適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A君の通う塾の場合、その構成員である生徒達の意志ではなく、テストの成績や入塾の時期などによってクラスが決められ、そのクラスでの生活を生徒達は強いられる。
- イ 家族の場合、両親の間に生まれた子どもは、自分の意志で親との関係を結んだわけではないが、当然のごとく家族の一員とみなされることになる。
- ウ 会社の場合、配属された部署の垣根を超えて、趣味を同じくするもの同士が仲間をつくることになる。
- エ 役所の場合、決められた役割分担に従ってその権限の範囲内での仕事を求められ、その仕事の過程もある程度予定されたものが望まれる。



問三

——線2「なかよし環境」とありますが、この環境にはどのような問題点があるのですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「なかよし環境」のメンバーが互いに有益な部分を共有する場合、メンバーの結びつきを守るためにルールに従わない者は他のメンバーからのいやがらせを受ける。

イ 「クラス環境」から生じた「なかよし環境」には、メンバーから外れる者に罰を与えることで引き締めを図るという「クラス環境」の特徴が維持されてしまっている。

ウ 「なかよし環境」の中にさらに第三者によってあからさまにつくられた「なかよし関係」では、メンバーだけの結びつきが強くなるのでメンバー以外の者はすべて無視される。

エ 「なかよし環境」では、互いにうちとけていたメンバー同士が場合によっては、いがみあったりのけ者を作り出してしまったりする。

問四

——線3「プロジェクト環境」とありますが、これはどのようなものですか。その説明になるように、次の文の空らんにあてはまる言葉を十五字以内で答えなさい。

・メンバーが  環境。

問五

A  にあてはまる最も適当な語句を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 選択      イ 行動      ウ 環境      エ 集団

問六

——線4「たくさんのプロジェクト環境に参加すること」とありますが、こうすることにはどのような利点があるので  
すか。その説明になるように、次の文の空らんにあてはまる言葉を十五字以上二十五字以内で答えなさい。

・  ことで、「思慮深さ」が培われるという利点。

問七

——線5「空気を読める」とありますが、問題文中での内容にあてはまる具体例として最も適当なものを次のア～エの  
中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 突然雨が降ってきて、傘を持たずに困っている近所の子供がいたので、自分の傘に入れてあげた。
- イ 図書館で空いている席があったが、そこはグループのリーダーであるA君のいつも座る席だったので、メンバーは誰も座ろうとしなかった。
- ウ 下校の時、テストの点数が悪かった友達に傷つかないように、一緒にいた仲間はテストのことを口にしなかった。
- エ 野球部の後輩達が先輩に言われて、毎朝練習が始まる前の早い時刻に登校しグラウンド整備を行った。

問八 — 線6「対話力」が「問題解決に至る思慮深さの学びとなるのである」とありますが、これを説明したものとして最も

も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代において私たちが直面している多くの課題は、チームの中で調和を保つための個人の配慮があった上で、はじめて検討することが可能になるものであり、この配慮は同じ目標をもつ者との対話をおして身につけていくものであるということ。

イ 周囲の者との対話をおして互いの文化や社会の共通点や違いを理解することによって、はじめて協調して社会的に困難な問題に取り組もうとする姿勢が生まれ、やがては打開できるようになるということ。

ウ 困難な課題に出会ったときに、自分と共通の話題をもつメンバー達と時間にとらわれることなく対話し、一人では得がたい知識を共有することで困難な課題に取り組んでいけるようになるということ。

エ 社会的動物である人間は、チームのメンバーとの対話をおして、多くの者と今まで経験してこなかった課題までも共有し、さらに対話から得られる深い思考をおして課題解決に向けての最適な選択能力を磨けるということ。

問九 問題文の構成について述べたものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「なかよし環境」「クラス環境」「プロジェクト環境」の順に、身近な者との人間的な感情の結びつきを基盤にした環境から社会的なつながりを基盤とする環境へと話題を広げ、一般的に人は「なかよし環境」「クラス環境」の中で生活するものだと述べている。

イ 身近な者どうしが偶然つくり出す「なかよし環境」「クラス環境」と、これらとは全く異なる環境として人と人との利害関係によって結びついた「プロジェクト環境」とを対立的に述べ、人はいずれかの環境に所属すると指摘している。

ウ 「なかよし環境」「クラス環境」「プロジェクト環境」それぞれの長所と短所を指摘し、これらを比較した上で、われわれが身をおくのに望ましい環境は、「プロジェクト環境」であると結論づけている。

エ 人は一人では生きられず、人生のさまざまな場面でいろいろな集団に所属するが、ここでは特に「なかよし環境」「クラス環境」「プロジェクト環境」をとりあげ、その違いを説明し、「プロジェクト環境」に参加する必要性を述べている。

【三】 次の文章は、伊吹有喜の小説『雲を紡ぐ』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

学校での人間関係の悩みを抱え、自室に閉じこもる時間が長くなっていた山崎美緒は、祖父絺治郎が運営する山崎工藝舎のタグがついたホームスパン（手織りの毛織物）の赤いショールを心の拠り所としていた。このショールは美緒が生まれたときに、今は亡き父方の祖母の香代によって作られ、祖父母から贈られたもので、美緒はそのショールにくるまっついているにだけ安らぎを感じることができたのだった。

ある日、美緒が学校から帰宅してみると、部屋に置いてあったショールが片付けられていた。母親の真紀がショールを捨ててしまったと勘違いした美緒は家を飛び出し、山崎工藝舎のある盛岡へ向かった。

盛岡に着くと美緒は山崎工藝舎を探してその工房に辿り着き、絺治郎と対面する。突然の孫娘の来訪に戸惑った絺治郎は美緒の父親の広志に連絡し、美緒が盛岡にいることを告げる。広志は家庭の状況を説明し、絺治郎はおおまかな事情を理解する。以下の場面はその翌日のことである。

山崎工藝舎の二階から、窓の外に広がる山を美緒は眺める。

夕方の四時を過ぎたら、山に雲がかかり始めた。しかしこの山は大きく、頂が雲に隠れても、目の前にたつぷりと裾野が広がっている。遠くにあるようで近くにあるようにも感じられる不思議な山だ。

窓にもたれて、美緒は室内へ視線を移す。

きれいに磨いた床板のつやが心地良い。その光を見ると、今朝のことを思い出した。

朝、起きると、二階のトイレの蜘蛛の巣が取り払われていた。階段の踊り場にあった大きな蜘蛛の巣も消えている。

祖父の「ご退散願う」という呪文は、蜘蛛に向かって言われたことがわかり、むしろ嬉しくなった。そこで自分の部屋を

掃除したあと、二階のキッチンと廊下にモップをかけた。

軽く拭いただけなのに床板につやが出たのを見て気分が良くなり、今度は階段を磨いてみる。

祖父が階段を上がってきた。

「掃除をしているのか。自分が使うところだけでいいぞ」

「でも、泊めてもらうから。あとで一階の廊下も玄関も拭く。お風呂も掃除する」

「ありがたいが、せがなくていい」<sup>注3</sup>

階段を上がりきった祖父が二階を見回した。

「ずいぶんきれいになったな……。ところで今日の四時にお父さんが盛岡に来る」

モップを動かす手が止まり、頭が自然と下を向いた。

「会社を休んで来るんだ、お父さん」

「半休を取ったとか言っていたな」

いつも不機嫌な父が仕事を休んで、ここに来る。忙しい人だから、さらに機嫌が悪くなっているだろう。それを考えるだけで

逃げ出したくなった。

そのときは、父がこの家に直接来ると思っていた。それが三時になると水色の軽自動車が玄関先に現れ、その車に乗って祖父は一人で出かけていった。車を運転していたのは川北太一かわきた たいいちという名の、父の従姉いとこの息子で、盛岡市内の大学に通っているようだ。

二人が父を迎えに行くのなら、その間にやはり逃げてしまおうかと一瞬考えた。

ところが出がけに祖父が「お願いがある」と丁寧ていねいに言った。人が来たら留守だと伝えるだけでいいので、家を空けないようにしてほしいという。やむをえず外に出る場合は、鈴を身に付けるようにと言ひ、畑はたけで祖父が腰につけていた鈴を渡された。クマ

除けだそうだ。

クマがいるの？ と聞くと、「わりと普通に歩いている」と太一がスマホを検索した。

差し出された画面は市役所からのお知らせだった。「クマに注意」とあり、目撃情報がいくつも並んでいる。

「……クマって動物園にいるものかと」

「そこにもいるけど、ここにもいるよ」

「今の時期は子グマもいるからな。あぶないぞ、注意しなさい」

あぶないと言うわりに、それほど心配する様子もなく、二人は出かけていった。

祖父の言葉を思い出しながら、美緒はため息をつく。<sup>2</sup>

父と顔を合わせるのは気が重い。家に帰るのもいやだ。しかし留守を頼まれたうえ、クマがいると言われると、この家から出づらい。そのうえ、あたりは暗くなってきた。

風が強くなり、木立が揺れる音が響いてきた。ひときわ大きく木立が鳴ったとき、一階で大きな音がした。金属が転がっているような音だ。

続いて、ものが激しく崩れるような音がした。

「やだ……クマ？ まさか……」

部屋から顔を出し、美緒は廊下にある消火器を両手でつかむ。

以前、読んだ漫画で消火器を侵入者に浴びせて、追っ払っているのを見た。きっと、クマに対しても効くだろう。

そのまま部屋に戻ろうとしたが、一階の様子も気に掛かる。<sup>E</sup>

消火器を両腕で抱えて階段を降りた。

この建物は、校舎のつくりと本当によく似ている。階段を中心に左右に廊下が延び、すべての部屋は教室のようにその廊下下面している。

玄関ホールに降り、美緒は左右を見る。



玄関から入って、ホール右手のドアを開けると、二階から察するに廊下がのびていて、三部屋分のスペースがある。この一角で祖父は暮らしている。

逆側のドアに美緒は目をやる。

この向こうにもおそらく廊下があり、広いスペースがある。ただしこのドアから先は、立ち入り禁止だと言われていた。風の音がして、家がきしみをたてた。

再び大きな音が響き、何かが落ちていている。間違いなく、立ち入り禁止の区域からだ。

ドアノブに触れると、あっさりとドアが開いた。

あかりをつけてみる。二階と同じく廊下が奥へ続いている。

消火器を構えながら歩いていくと、廊下に面してドアが二つあった。

手前のドアを開けてみる。コンクリートの土間が広がり、あたりには湿気がこもっていた。

あかりをつけると、水色のたらいが六個、大きなステンレスの寸胴鍋ずんどうなべが四個、土間に転がっていた。棚には他にも大小さまざまなたらいや鍋が積まれている。

風が吹き込んできた。この部屋の窓が全部開いている。

4 「風だ……。風で崩れたんだね、積んでたたらいが」

音の正体がわかると、肩の力が抜けた。

なんだ、とつぶやいて、消火器を土間に置き、美緒はほっと一息つく。

窓を閉めて去ろうとしたが、あたりに立ちこめる湿度に手を止める。もしかしたら空気を入れかえていたのかもしれない。

そこで、窓を少しだけ開け、床に落ちているものを棚に戻して、廊下に出た。

二階に帰ろうとして、ふと立ち止まる。

もう一枚のドアから、ひんやりとした空気がかすかに流れてくる。



祖父が床に置かれた消火器を見た。

「どうして二階の消火器がこんなところに」

「目潰し……。下で音がしたから、それ持って降りてきた。何かいたら、これで目潰しを」

けわしい顔が少しゆるみ、祖父が消火器を手にした。

「たしかに目潰しにはなるが。その音というのは一体何だったんだ？」

「この部屋じゃなくて、隣の、コンクリートの部屋……。窓が開いていて、風で物が落ちてた」

祖父があわてた様子で部屋を出ていったが、すぐに暗い顔で戻ってきた。

「なんてことだ。戸締まりはしたつもりでいたんだが……」

椅子に腰掛けると、祖父が両手で顔を覆った。

あの、とためらいながらも、美緒は祖父に声をかける。

「お父さんは？」

「帰した」

「東京へ？ どうして？」

「帰りがかったのか？」

顔を覆っていた手を、祖父ははずした。

「帰りたいのなら、明日、東京の家まで送る。帰りたくないのなら、ここにいればいい」

「いてもいいの？」

祖父はうなずき、「座れ」というように向かいの席を指し示した。

「週に一度、お父さんに必ず連絡することを約束できるなら」

テーブルの上の「香葉の布」に美緒は目を落とす。淡いピンクやオレンジ色がフルーツのシャーパーットのよう<sup>6</sup>できれいだ。

「でも、お父さんは忙しいし……私のこともそんなに心配してないと思う」

「何も言わなくても、親は子どものことをいつも気にかけているものだ。直接話さなくてもいい。元気でやっていることさえ伝えれば」

「LINE<sup>注4</sup>でもいい？」

祖父がうなずくと、「香葉の布」を片付けようとした。

「あの……待って。その布、すごく……やさしいね。これもホームズパン？」

祖父が淡い黄色の布を手にした。

「これは紬<sup>つむぎ</sup>、絹だ。植物で染めている。元の色と変わってきているが、この色は丁字<sup>ちようじ</sup>という植物から」

祖父が薄桃色、オレンジ、薄緑のショールをテーブルに並べた。

「これは茜<sup>あかね</sup>、枇杷<sup>びわ</sup>、よもぎから染料を取っている」

「ここは金庫？ 高そうな絨毯や糸がいっぱいあるね」

「コレクションルームと呼んでいる。貴重なものはあるが、この一角に入ると言ったのは、それが理由じゃない。隣の部屋に化学薬品があるからだ」

祖父が薄桃色のショールを手にとると、ふわりと頭にかけてくれた。

「薬品って何に使うの？ 枇杷やよもぎから染めるとき？」

「私は草木からは染めない」

頭にかけてもらった薄桃色の布に美緒は触れる。絹はすべすべしたものかと思っていたが、この布はざっくりとしている。

祖父がテーブルの上のショールを片付け始めた。

「布に興味があるのかね？」

「興味というか……ほっとします。ホームズパンのショールにくるまってるって安心するの。大丈夫。まだ、大丈夫って思えて」

祖父が立ち上がり、頭からかぶっている薄桃色のショールを、ベールのように整えてくれた。照れくさくて、ほんの少し笑ってしまった。祖父が背中を向けた。

「ホームスパンに興味があるのか。それなら、ここにいる間にショールを作ってみるといい」

「えっ、どうやって？ 私、手が不器用だし、要領悪いし。今まで何もちゃんとできたことがない」

「器用か不器用かより、作りたい気持ちがあるかどうかだ。仕事としてはシンプルな作業だ。染めて紡いで織る。神話の時代から世界中のあちこちで営まれてきた、祈りにも似た手仕事だ」

祖父がたくさんの糸を収めた棚の前に行き、赤い糸の束を一つ引き出した。

「なかでも人は色にさまざまな願いを託してきた。赤い色に託すのは生命、活力、招福しょうふく、魔除けまじけ。だから初宮参りの贈り物にはあの色を選んだ」

糸の束を手にした祖父が棚を見上げた。

「ずっとあの布をそばに置いてくれたんだな。楽しいときも苦しいときも、あのショールが常にお前と共にあったのだと知って、私たちはうれしい。だが大きくなった今は、自分で選べばいい」

「選ぶ？ 何を選ぶの？」

「自分の色だ」

祖父の隣に並び、壁を埋め尽くささまざまな色の糸を美緒は見上げる。ピンクもオレンジも緑も青も、ここにある色、すべてに目が惹ひきつけられてしまう。

「まずは『自分の色』をひとつ選んでみる。美緒が好きな色、美緒を表す色。託す願いは何だ？」

「考えたこともない……私の色？」

せがなくてもいい、とおだやかな声が出た。

注1 ショール……頭からかぶったり、肩に掛けたりして使う防寒や装飾のための布。左の【図】を参照。



注2 「ご退散願う」……前日、蜘蛛が苦手だと言った美緒の前で祖父が言った言葉。美緒はその言葉が蜘蛛と自分とのどちらに対して言われたものなのか分からずに、不安に感じていた。

注3 せがなくていい……いそがなくていい、慌てなくていいという意味。

注4 LINE……SNS（ソーシャルネットワークサービス）の一つ。

注5 初宮参り……生後一か月目前後に、生まれてきた子供の無事を感じ、将来の幸せを願って神社にお参りすること。

問一 〓線 a ～ c が主語、または修飾語として係る（結びつく）部分を次の各文の傍線部から一つずつ選び、記号で答えなさい。

山崎工藝舎の 二階から、窓の外に 広がる 山を 美緒は 眺める。

そのときは、父が この 家に 直接 来ると 思っていた。

以前、読んだ 漫画で 消火器を 侵入者に 浴びせて、追っ払って いるのを 見た。

問二 〓線 A ～ I の語を言葉の種類ごとに分類した組み合わせとして、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア AC / BE / DFH / GI
- イ A / BEFH / C / DGI
- ウ AG / BEH / CF / DI
- エ AC / BEH / DF / GI



問三 ———線1「今朝のことを思い出した」とありますが、このとき美緒はどのようなことを思い出したのですか。その説明

として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ご退散願う」という祖父のことばが自分に向けられたものではないことを知って安心したものの、いつ祖父の気持ちが変わるとも限らないので、機嫌を取るために掃除をしていたこと。

イ 家出をした自分を受け入れてもらえたことを嬉しく思い、自分から進んで家の中を掃除していたが、父がこの盛岡まで自分を迎えに来ることを祖父から知らされて逃げ出したくなったこと。

ウ 家出をした自分が盛岡に来ていることを、祖父がいち早く父に連絡していたことを知らされ、祖父も太一もすんなりと自分の味方になってくれるわけではないと痛感させられたこと。

エ 父と顔を合わせることへの気まずさから、祖父と太一が父を迎えに行っている間に逃げ出してしまおうと考えたが、クマが出るという話を聞かされ、それは父より恐ろしいと感じたこと。

問四

——線2「美緒はため息をつく」とありますが、このとき美緒はどのような気持ちだったのでしょうか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山崎工藝舎の周辺に危険なクマが出ると言っておきながら、大して心配する様子もなく太一と出かけていった祖父は、自分のことを心配してくれないのだと思い、どこに逃げたとしてもやはり自分は孤独なのだと思ってしまう。

イ 大して心配する様子もなく自分を一人きりにして出かけて行った祖父や太一と比べ、家出した自分を忙しいのに目を置かずに迎えに来る父の優しさを思うと、自分の行動が身勝手だと感じられ、心配をかけたことを深く反省している。

ウ 急に家出した自分を迎えにやってくる父に、どんな言い訳をしたらいいのか分からず、盛岡から東京に戻るまでの車中での沈黙を想像すると、その時間が堪えられないものを感じられ、目の前が暗くなるような失望を感じている。

エ 家出した自分に会いにやってくる父と会うのは気まずいが、祖父から留守番を頼まれたうえに、周辺にはクマが出るということを考えると、暗くなってきた時間に逃げ出すわけにもいかず、父と会う覚悟が決められずに困惑している。

問五

——線3「このドアから先は、立ち入り禁止だと言われていた」とありますが、どうして立ち入り禁止なのか。その理由を述べた部分を問題文中から十四字で抜き出して答えなさい。

問六

——線4「音の正体がわかると、肩の力が抜けた」、——線5「思わず声が出た」とありますが、この間の美緒の心の動きはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美緒は、祖父から立ち入り禁止とされていた区域から聞こえてきた大きな音に、強い不安を感じていたが、その音が積んであったらいや鍋が風に飛ばされたことによるものだとわかり、いったんは安心する。しかし、誰もいないはずの隣の部屋から流れてくるエアコンの冷気に気づいて再び不安を感じ、様子を確かめるために扉を開けあかりをつけると、そこには色とりどりの美しい糸の束が整然と並べられており、美緒は見たことのないその美しさに驚き、感動した。

イ 祖父と太一からクマが出るという話を聞かされていた美緒は、一階の立ち入り禁止区域から聞こえた大きな音が、もしかしたらクマが自分のいる建物に侵入してきた音なのかもしれないと恐怖を感じていた。しかし、実際にはクマはおらず、エアコンの冷気が流れてくる部屋に誰か人が居るだけだと感じた美緒が安心してその部屋の扉を開けると、そこには美しい色彩を帯びた糸の束が所狭しと並べられており、美緒はその美しさに我を忘れるほどに魅了された。

ウ 建物の二階にいた美緒は、一階から聞こえてきた大きな音に、とんでもないことが起こったのではないかと不安を感じ、貴重な糸や絨毯に何かあったらいけないと、恐ろしさをこらえて消火器を護身用の武器代わりに様子を見に行く。一階の部屋で染色用の鍋やたらいが風に飛ばされたのだと知ると、美緒はいったん安心する。ふと気になった隣の部屋の扉を開けると、そこには色彩豊かな布がずらりと並べられており、美緒はその美しさに心を奪われた。

エ 祖父に立ち入り禁止と言われていた区域から大きな音が聞こえ、まさかクマが建物に侵入したのではと恐怖におびえつつ消火器で武装した美緒は、誰も居ないはずの部屋からエアコンの冷気が流れてくるのに気付く。その部屋の中にあつた丸テーブルの上に淡い色合いのショールが数枚置かれ、直前まで誰かがそれを眺めていたかのようであったのを見て、熊ではなく誰かが密かに建物に入ってきていたのだと思い、不安をぬぐうことができずにいた。

## 問七

——線6「淡いピンクや〜きれいだ」とありますが、このときの美緒の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父に毎週連絡を入れないといけないと祖父に言われたことに大きな負担を感じていたが、「親は子どものことをいつも気にかけているものだ」と諭されると、親子の関係が目の前の「香葉の布」の色合いのようにやさしさにあふれたものであるように感じられ、いきなり家を飛び出して両親に心配をかけたことをたいへん心苦しくすまないと思う気持ちになっている。

イ 祖父の行動は予想外で、思わず「どうして」と聞いてしまったが、自分のことを大して心配しているとも思えない父を追い返してくれた祖父のやさしさは目の前にあるショールの淡い色合いのように控えめではあるものの、今の自分に対して配慮の行き届いた十分なものであり、その思いやり深く温かい人柄に強い安心感を覚え、祖父のことをもつと知りたいと感じている。

ウ 仕事が忙しく大して自分を心配しているわけでもなさそうな父にわざわざ定期連絡を入れ、東京の家族とのつながりを保つことを、山崎工藝舎にとどまるための条件として祖父から提示され、気まずさを感じずにはいられなかったが、目の前にある「香葉の布」は、自分を癒やしてくれそうな柔らかくやさしい色合いを帯びており、その色彩に強く惹きつけられている。

エ 祖父が父を美緒に会わせることなく東京に帰したことはとても意外で、しばらく祖父のもとにいてもいいとわざわざ告げられると、東京の家族のもとに帰らなくてもいいのだろうかという不安が頭をもたげ、本当に自分はこのにいてもいいものかという思いが湧き上がってきて、目の前のショールの淡い色合いのように、どうするべきかはつきりと決められずに迷っている。

問八 — 線7 「まずは『自分の色』〜とおだやかな声でした」とありますが、この時の絃治郎の美緒に対する思いはどのようなものだと考えられますか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問九 問題文中で美緒の祖父絃治郎はどのような人物として描かれていますか。その説明として最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲にクマが出没していることで美緒をおどかしてみたり、父親のことを持ち出して美緒を困惑させたりする一方で、美緒が興味を示したホームスパンの布について、その歴史をさかのぼって詳しく丁寧に説明してくれるような親切な態度も見せており、幾分つかみどころはないが根は優しそうな人物として描かれている。

イ 突然家出してきた美緒のことを事情を知って受け入れる寛容さを見せている一方で、美緒が家の中を進んで掃除したことについて特にほめたりするわけでもなく、クマが出ると言いながらも大して心配するそぶりも見せずに美緒に一人きりで留守番をさせるような、素っ気ない人物として描かれている。

ウ 決められた約束事はしっかりと守らせようとする厳しさを持っている一方で、突然家出してきた美緒のことをおおらかに受け入れるだけでなく、彼女の置かれた状況をよく考えた上で、その困難を乗り越えるための手助けをしてやろうという懐の深い優しさを持った人物として描かれている。

エ 悩みを抱えた美緒の今の状態を心配し、早く本来の道に戻るべきだと願う一方で、無理に美緒を東京に帰すのもかわいそうに感じられるため、どうしたらいいのかを決められず、結果的に彼女の希望をすべて受け入れてしまふような、優しいけれども優柔不断な人物として描かれている。

問題はこのページで終了です。

